

平成 21 年度 第 1 回 利尻山登山利用検討会 についての アンケート 結果

1. 【資料 3】「利尻山登山利用のあり方」のとりまとめ について

1-1. より多くの島民の方と「利尻山に対する地域のビジョン」に育て、地域からのメッセージとして対外的に発信していくために、「あり方」に盛り込むべき視点・内容、またメッセージを伝えるために効果的と思われる表現についてご意見をお聞かせください。(資料 3-2pp～3-3pp)

- 「登る権利、心を配る義務」
 - 登山は権利として与えますが、「ルールを守りなさい」という直球より、やわらかい言い回しで心にささる表現
-
- 「いつまでも、誇りにできる山であるために」・・・とか？
 - 人によって何を誇りとするかは別ですが、あえてその内容には自由をもたせてみました。今の段階ではどの主張をとっていいか分からなかったのです。**具体的にどのような場で誰に対して使う表現なのか**を考慮して、**対象にあったものに表現を変えていくようにすればいい**と思います。**自分の身近に感じられる事柄や利益を誇りにつなげてクローズアップして追記していく**とか。利用する人に対しても、消費でなくて継続性や次世代にその利益を残していくために・・・とすると、**自然環境を守っていくことはすべてに通じる**と思います。
-
- 地域の財産、地域のよりどころ、地域の誇り、地域ブランド等、**地域のモノ、自分たちのモノ**であるという表現
-
- 我々、島民は山の裾野に住んでいます。利尻島は島であり山だと考えます。もっとも重要なことは、山を生活の糧とし、この島で暮らす人々の生活だと思えます。
 - [表現について] この島に住むほとんどの方々が、利尻山は隣にある山、といった考えの方が多く感じますが、我々が住むこの島は山であるというぐらい、**山を身近に感じられるような表現**ができ浸透していけば「利尻山に対する地域のビジョン」も「あり方」も明確になるのではないのでしょうか。「島民」よりも「山民」など。
-
- 「**利尻山は島民の生活に直結している宝の山**」である。水の恵み、森とつながる豊かな海、そこから生産される豊かな漁業資源、山菜の宝庫、宗谷の観光のシンボルでもあり、島の二大産業の観光産業の礎でもある。これを守ることは島民の生活を守ることでもある。

-
- 「あり方」の視点として重要と思われるのはやはり**地元の島民から見た視点**、たとえば**島民がどのように利尻山を理解しているのか、どのような形で利尻山を保護していけばいいのか**等の視点が必要かと思います。内容は、上記視点をふまえて**独自性がありかつ島民が理解できるもの**がよいのではないかと思います。
 - 表現はできるだけ分かりやすいもので、**標語みたいに覚えやすい言葉**が使われているといいのではないかと思います。

-
- 「利尻山と向き合い語り合い尊重し合う！」

-
- 視点と内容は提示されている物でよいと思いますが、やはりもう少し**具体的に内容が伝わるような表現**をする必要があると思います。たとえば、

利尻山持続可能な登山憲章

「利尻山は、厳しい気象や壊れやすい自然環境に特徴がある山です。将来にわたって自然環境を持続的に利用するために、安全で自然に配慮した登山の実践と対策を行います。」

- 一 利尻山の登山者は、厳しい自然環境と荒廃する登山道の現状を理解し、自己責任で、環境に配慮した登山を行います。
- 一 利尻山では、登山の利便性よりも、脆弱な自然環境の保全を優先した整備と管理を、関係機関の協力のもとすすめます。
- 一 利尻山の登山利用のあり方、登山道とその周辺の整備においては、島民や登山者の意見を聞きながら、関係する様々な人々が相談・協力しながらその対策をすすめていきます。

などとして、これに細則*をぶらさげる？一般に伝える物はシンプルに細則なしで。

*スローガンのものだけでは、うまく意味やバックグラウンドが伝わらないかもしれないので、一般の人に広く見て貰う物からはのぞいておいてもよいけど、少し詳しく説明する資料には載せておくようなもの

一案です。

-
- 「あり方」に盛り込むべき視点・内容について、以下のような流れを考えてみました。

① **利尻島（利尻山）の独自性**

利尻が自然環境として如何に独自なものであるのか。如何に他と異なった特質を有しているのか。その特異な自然環境資源を基盤として育まれてきた地域社会の歴史、産業構造、精神世界が如何に独自なものであるのか。

② **「内」からは見えない利尻の独自性**

島「内」で生活する者にとって利尻山は日常（生活の場）であるが故、その独自性に気づくことは難しい。一方、評価軸を持つ外部の者にとっては他との比較は容易であり、利尻の独自性を見抜いた者は島を訪れることとなる。

③ **環境収容力の限界性**

人の自然利用には環境への負荷が大なり小なり必ず含まれる。「島（山）」という狭い空間が持つ環境収容力を考慮せずに利用を続けては、将来、自然環境の疲弊および地域社会の破綻が必ずやってくる。

④ **「気づき」の重要性**

今日のみならず明日も島に生活する者は、島民である。島民が上記の独自性や限界性に気づかなければ、誰がその特質を護るというのか。誰が今日そして明日からの島の生活（地域社会）を護れるというのか。島民自らがこのことに気づく必要がある。

⑤ **島（山）と生きていくために。（持続可能な島の生活）**

これからも島（山）とともに生きていくために私たち島民ができること、すべきことを考え、明日ではなく今日から行動に移していこう。

※メッセージを伝えるために効果的な表現は上記箇条書きに含まれているように思います。

前回提案されていた「利尻山とより長くつきあうために」という言葉はとてもよいと思っています。

しかし、「つきあう」には、以下のように、お互いが合意の上でのことであったり、義理から相手をするというニュアンスがあって、

つき - あ・う【付き合う】

- 1) 双方からつく。
- 2) まじわる。交際する。「悪友と一・う」
- 3) 義理や交際上の必要から相手をする。「一杯一・う」「買物に一・う」

[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

利尻山はおそらく人間とつきあいたいとかどうだとか全く思ってもおらず、そういうつきあい方を超えた存在という気もしています。

また、おつきあいを前提とする人間側の意識がちょっと強く、「自然環境を守る」視点が弱くなってしまふかもしれないとも感じています。

他によい言葉がないかと探しましたが、よいものがなかなか思いつきません。

お互いを尊重しつつ、共に長く寄り添っていきたいというニュアンスで、「歩む」という言葉をいれてみると・・・

「利尻山と共に歩むために」

「利尻山とより長く歩いていくために」

「私たちが利尻山と共に歩いていくために」

「利尻山と私たちが共に歩いていくために」

「利尻山と共に歩いていくために」

「これからも利尻山と共に歩いていくために」

「これからも利尻山と歩むために」 etc.

ただし、「つきあう」より私たちが利尻山とどうしていきたいのかがぼやけてしまい、いまひとつしっくりきません。

1-2. 利尻山に対する基本的なスタンスを示す「あり方」と課題解決に向けた具体的な対策をまとめた「管理方針」に整理することについて、ご意見をお聞かせください。(資料 3-2pp)

- 「あり方」：町民憲章的なもので大枠な感じで良いと思う。
- 「管理方針」：管理に関する計画書みたいなものをイメージしている。

- **目的と、対策**という意味で、整理していくのは必要と思います。(すいません、会議内容がつかみきれなくて、的外れかも。それともどう整理していくかについてでしたか?)

- 管理方針で整理することは重要である。「管理方針」という言葉にアレルギーがあるのであれば、別の言葉でも良い。

- 良いと思います。

- この会にどこまでの権限があるのか?あくまでも**民間の任意団体として、あるべき姿を話し合い、共通認識に立てたものを、対外的にも理解を深めていただく取り組み**をしていくことだと思います。
- そのためのスケジュールを「管理方針」というのであれば言葉としてはいいのかも?

- 「あり方」を整理することは島民にとっても**身近な利尻山を今一度見直す良い機会**になるのではないのでしょうか。
- それに基づいて「管理方針」が出され、できることから実行していくことになり、現在の登山道整備と連動して島民には**利尻山と長く付き合っていくための自主的な活動が起きれば**なお良いことだと思います。

- いまいち理解しづらい形になっているように感じるので、**あり方は「コンセプト」とし、そのあり方に対して進めていく「取り組み」を管理方針**という分け方にしては?はっきりした分け方がどこかでないと難しい組織に感じてしまうところがある。

-
- 検討会では「あり方」の暫定案をつくり、現状で考えられる対策をメニューとしてあげておくのが良いと思う。「管理方針」をかかげてもすぐにそれらが実行できるとは限らないし、すぐに実行する必要性の低い物もあるだろう。
 - 「あり方」と「管理方針」のあいだに、**あり方で示されるビジョンの現状を把握し評価を行う段階が必要**だと思う。それによって、現状があり方で示している目標を満たしていれば「管理方針」は現状の管理行為を維持することになるだろうし、満たしていなければ新たな「管理方針」および対策の検討が必要ということになると思います。

-
- 各々の位置づけはその通りで良いと思います。賛成です。

■"「管理方針」の実体が実は具体案である"という言葉のずれの違和感が常につきまとう

『「管理方針」は具体案と決めよう』ということでもいいのですが、あとあと混乱を招くことになりかねないのではと危惧しています。

よって、できれば「管理方針」と呼ぶのは、たとえば資料 3-3 における A-C を以下の例のように方針らしく整えることでおさえて、**具体案は「管理方針」と呼ばない方がいい**のではないかと思います。

- A. 登山者にもってほしい心構えなど利用者へのはたらきをすすめる
- B. 自然環境の保全を優先した登山を基本とする
- C. これからもずっと登山ができるような様々なしくみや連携をすすめる

さらに言えば、この検討会で決める個別の具体案については、**おおまかな道筋を示す「方針」のイメージをよりはっきりと伝える「実施例」程度のものでよい**のではないかと思います。

具体案を必要としている理由は、「来年の協議会で検討するための対策案が早急に必要」ということだと理解していますが、それは協議会の理由であって、本検討会の目的としては最上位にあたるものではないように感じています。

もちろん余裕があれば具体案でイメージを固めていく作業を進めていっても構いませんが、「**あり方**」を叩き台から今後どのように地域の声として定めていくのかや、**仕組み作りの細部を詰めていくことの方が、本検討会の本来の役割としては重要なこと**のように思われます。

本検討会の立ち上げ時の素朴な疑問として、「なぜ協議会があるのに、検討会などを立ち上げる必要があるのだろう」ということがありました。

協議会には最高決定権を持つ方々が集まり、外部からみた場合、その本来の機能として、これから利尻山をどうしていこうという「あり方」のほか、具体策を様々な視点から協議・決定し、実施していると思われる機関のほずで、検討会が設置される理由が見つからなかったからでした。

ところが、いろいろな理由から私たちが想像している協議会の本来の役割が機能していないこと

があるらしいということから、そこを「どうやったらうまく動くようになるだろうか」ということを検討することに、本検討会の存在意義を見いだせたように思います。

そのため具体案をつめるよりも、**どのように協議会で機能していない機能を働かせるか、足りない部分をどのような方法で補完するか**、などの方法論を考えることを優先すべきで、ある程度の具体案は仕組みができあがってからも十分考えることはできるのではないのでしょうか。

■ 「あり方」「方針」という言葉にはある程度の普遍性・継続性のニュアンスがある

前回までの話で、

- ・ 検討回数やメンバーの制限により、地域の総意としての最終的な「あり方」を今回の検討会では決定できない
- ・ 今回の「あり方」は、叩き台である
- ・ 山や体制の状況変化によって具体的な対策も変化していくため、「管理方針」が具体案まで含むとすれば、「管理方針」は年によって変化していく

ということが確認、または想像されました。

これらのことから、「あり方」「管理方針」は**今後に変化していく可能性がある**と言えます。

しかし、冒頭に書いたように、「あり方」「方針」という言葉には**多少のことでは変わらない、ある程度の継続性や普遍性を感じさせる言葉の力**があり、そのことで違和感が常につきまってきました。

どうせ変化するのであれば、それを**見た人が変化を予想できるように**、

××年度のあり方 「・・・・・・・・」

××年度の管理方針 「・・・・・・・・・・・・・、・・・・・・・・・・・・・、・・・・・・・・・・・・・」

という表記をしてもよいのではないかと思います。

上記の表記にした場合、**現状で最良のメッセージだった**とメンバーも言えるし、その**時代の着眼点をあとから象徴するもの**と捉えることもできるし、さらには**次の変更を見据えた短期的なものや時代に即した重点目標的なテーマ**をあえて選ぶこともできるようにも思えます。

ただし、欠点としては、この表記ではその**メッセージがその年度限りの単年度のものと誤解されやすい**ことです。

もちろん表記しない場合は、「あり方」が数年後に変ったとすると、経緯を知らない後世の人たちは私たちがいい加減に「あり方」や「方針」を決めていたのではないかと、いぶかしがるのではないのでしょうか。

別な方法としては、3年などのある**決まった年数で見直す**ということをあらかじめ決めることができれば、「第〇次（〇年～〇年、今後3年間）のあり方」などと表記できて、どちらの誤解も解消されるかもしれません。

「あり方」についてはよい案も出されているようですので、今年の「あり方」を来年度以降、地元の声としてうまく認めていただければ、変更されることなく、ずっと使い続けることもできるかもしれませんが、「管理方針」については、**方針をどれくらい使い続ける気持ちでいるのかによっては、なんらかの表記の工夫などをしなければと**ならないと思いますが、いかがでしょうか？

1-3. 「管理方針」テーマ別個別対策リスト案に示したものの以外に、考えられる対策がありましたらお書きください。(資料 3-5pp)

- 示されているもので十分と感じます。

- 今は思いつきません。

- 「データの蓄積・モニタリング」に「年報利尻山」の発行（基礎統計データ、検討会の内容や記録、その他山であった出来事の記録や活動日報、関連文献など）を追加。

- 特に思いつきません。

- (特になし)

- **登山道に関する危険（倒木等）の情報を現場の人が共有できる連絡・情報提供の体制づくり**

- 「地元住民との対話」や「地元住民への情報周知」など、**地域にもっと現状を把握してもらうなど、地域への取組み**も組み込んでみては？

- かなり出尽くしている感じがあり、次の質問にあるような整理をしてみることで、過不足が見えてくるかもしれません。

- 既に記載されていますので新たな案ではありませんが、上記 1-1 の回答との絡みで、「**地域住民の現状認識・関心の向上**」という項目を、**外来の登山者への対策以上に位置付ける必要がある**ように思えてきました。

1-4. 個別対策リストの中から具体化・実施する対策を絞り込む（優先順位を決める）ための視点とその判断基準、評価のしかたについてご意見をお聞かせください。（資料 3-4pp）

- 「急を要する事柄」から考えていってはどうか

- 個人の立場と考え方によって異なると思うので、会でそれぞれの立場の話を聞きながら、考えていきたいです。基本的に会のスタンスが「自然環境を守ることを・・・」ということでメンバーの合意を得られたのであれば、それを基準にすりあわせていくことが必要だと思います。それを基準にした上で、**登山を続けるためにできることを探していく**。昨年出ていた「**利用禁止の基準づくり**」が一番かも。「**登山禁止**」は保護には最良だけど最後の手段だということはコンセンサスがとれていると思うので、**最後の手段をとるまでの間の保護と利用のバランスのとれる方策をみつけていくこと**。その都度、禁止基準に照らして各方策を見直していく必要があると思います。

- **現段階での整備水準と利用状況を照合し、緊急度から対策を絞り込む**

- 網羅されていると思います。人材（労力）や予算が確保できるのであれば、全ての施策を実行していきたいですね、、、 予算が無いのであれば、費用確保（入山料、CSR、基金）や物販などで**運営団体の補強**が重要ですね。

- 崩壊を止めるための対策を最優先（ハード）。そのための利用上の注意等の PR（ソフト）。

- 現状の登山道を考えて、**現状の登山道を維持するために必要な対策**が第一優先と考えます。
- まず、**即効性の高いものから順に優先順位を設定し**、たとえば「人材の確保、育成」はすぐにはできないものではないし、長期的に見て考えていかなければならないことなので順位は下の方になるのではないかと思います。

- 基本的には**ソフト系（情報提供・周知など）の対策は優先すべきだ**と思う。
- 視点や判断基準の設定は難しいものがあるが、班に分かれて作成した個別対策を、再度他の班で検討して熟成していくのはどうか？新たな案も出る可能性も考えられる。そうしたなかで、優先すべきものは同じものがチョイスされるなどし、必然的に優先順位決まると思うが・・・。

-
- 対策には、緊急性の高い物から長期的に取り組むべきもの、すぐに実施できる物から実施には時間がかかるものという、**緊急性と実現性**という軸で評価してはと思います。
 - LAC などでは収容力設定の指標を選ぶ際の基準として、計測可能性 measurable、対策の実現性 manageable、代表性、希少性、代替性、関心度などがあげられており、参考になるかもしれません。

-
- **視点、判断、評価ともに、全ての基準は「あり方」に網羅されているべき**であると思います。したがって、その「あり方」を如何につくるかが最も難しい作業のように思います。また、**協議会の方針との整合性**を十二分に考慮して進めていく必要があります。

来年以降、検討会（部会）から協議会に向けて個別対策案が提案されることになっていく流れについてはほぼ確定と考えています。

ただし、**どんな仕組みになっていくのかが今現在明らかになっていない時点では、今、こちらで一方向的にふるいにかけて今の検討会から協議会に個別の具体案を提案するとはならないような気がしています。**

「具体案を早く提出するために、急いで優先順位の視点をとにかく作り上げる」というのが今の雰囲気と感じていますが、「**どんな優先順位の判断や提案のしくみをすれば、検討会や協議会でより多くの具体案の検討がしやすいか**」という議論の焦点にもっていければよいと思っています（ニュアンスの違いだけかもしれませんが、私にはなんとなくこのあたりに違和感があります）。

質問からはちょっとはずれるかもしれませんが、検討会（部会）から協議会へどんなしくみ、またはランク付けで案が提出されうるかを考えてみたことを、ご参考までに以下に記しておきます。

■順位付けは行うが、検討会（部会）ではふるいにはかけない

（1段階目）**検討会（部会）では、主に利尻山の保全を優先（*）した順位付け**を行い、協議会にランク付けされた案をすべて提出する。

（2段階目：最終決定）**協議会では、提案されたものについて保全以外の様々な分野の調整意見に基づいた順位付け**を行い、**最終決定**を行う。

*保全を優先

以降の質問2にも書きましたが、来年度以降の検討会（部会）は、（1）最高議決権を持たない、（2）実働部隊にはなりえない、（3）様々な視点や意見が集められる可能性はあるが、それを統括する機関とは限らない・・・などのことが考えられるため、具体案の最終的な優先順を決め、絞り込んだ上で、協議会へ提出することは極めて困難と思われまます。

よって、今回の視点であげられていた「**自然環境を優先した登山**」の視点で優先順位をつけ、**すべての案を上位機関の協議会へ提出し、環境保全以外の視点も含めて協議・最終決定してもらうべき**と考えています。注意したいのは、検討会（部会）では**環境保全以外の利尻山への幅広い対策案（たとえば観光面など）も企画・立案しますが、検討会（部会）内での順位付けは保全を優先した**ものとなる、という点です。

■順位付けの視点：優先ランク、チェックシートの作成

（以下は検討会での優先ランクの協議の仕組みについての案です）

視点は「**環境保全**」を**最優先**し、その他の視点（安全利用、地域経済など）については状況に応じて協議を検討する。

環境保全の立場では、**緊急性、固有性、継続性、実施のコスト、他機関の状況**などから優先度合いを判断する。

判断のために、あらかじめ**5段階程度の優先度ランク**を決めておく。

例：A すぐに行動を起こさないと利尻山固有の環境が失われる可能性が高い

B 年内に行動を起こさないと利尻山固有の環境が失われる可能性が高い

評価する具体案については、**チェックシート**などを用いて、その結果がどのランクにあたるかを客観的に判断する。

例：固有種への影響があるか？

変化が起きる面積は大きいのか？

対策のためのダメージ以上の効果が対策後にあるか？

各具体案についてランクを記入し、すべてのランクの案を協議会に随時提出する（検討会では絞り込まない）。

協議会ではそのランクを参考にしつつ、**実行性やそのほかの視点から最終的な優先度を決めて実行の協議を行い、最終判断・選択**をする。

保留になった案については随時、検討会および協議会で毎年検討し、実施の可否や修正案の検討などを続ける。

チェックシートやランクについては不具合があれば、**毎年更新、改良**していく。

2.【資料4】協議会との連携強化に向けて について

将来にわたって利尻山登山利用のあり方を考える組織「(仮称)利用のあり方検討部会」はどのようにあるべきとお考えですか?「検討部会に求められる機能・役割」、「組織に必要と考えられる人材・協力者」、「活動しやすい組織のかたち」等の面から、ご意見をお書きください。

- **現場を知っている人達の集まり**は必要である。そういった人達の意見であるからこそ協議会等上層組織への提案・提言が説得力あるものとして協議されると感じる。
- 実質、登山に関する具体的な方策を検討できない協議会にかわって、**必要な案件を実現化できる形で差し出す機関**として、役割を持っていけるという資料3-4のかたちでいいのではないだろうか。
- 人材としては**各分野からの人員を確保**することが大前提で、そのうえ**機動力のある人物**が望ましいと思います。各関係機関の事務局的な役割を担っているか(所属する機関の意向をよく理解している人)、各分野の代表格とつながりをつけられる人が必要。**最低限の人数の会議**で各機関に検討内容が反映されていけるような組織の持ち方ができるといいと思います。間口は広いにこしたことはありませんが、**会議の意見集約のためには効率的な小人数の組織を中心にして、その上で他の意見を取り入れる形**を考えたいところです。
- 検討部会は**登山道の現状、利用状況を良く把握している人材**が相応しく、**専門家的な適切な意見を正しく提案**できることが必要。
- **自立できる組織**であってほしいですね。
- 検討会と協議会の関係(連携)を強めていくべき。そしてそれぞれの発言は拘束しないこと。
- 「利用のあり方検討部会」は**地元島民の意見をできるだけくみ取り、それを協議会へ提案**できるような組織であるべきだと思います。
- そういう意味では**協議会の関係団体の影響を受けない完全に独立した組織として自由な意見を出し合える場**となるのが一番いい形ではないかと思います。

■ 機能、役割について

- 今まで同様、**テーマに沿って活発な意見が出る環境づくり**が大切だと思う。
- そういったなかで、現状の協議会では意見を交わしあう場面が少ないこともあり、今後は**大きなテーマを何点か設け、そういったなかでより具体的な案や活動方法を示していく**ことが大切だと思う。**(優先順位つけて)**
- ただ、活動するには**予算的問題**は避けられず、そこを**協議会事務局と調整していきながら**進めて行ければベストだと思う。
- 基本的には、**将来を見通したビジョンを公表したうえで、事業計画の一部を策定できる組織**でありたい。

■ 必要と考えられる人材、協力者について

- 特に現状のままで問題はないように感じられる。**女性が少ないのでは?**と感ずることもあるが。
- 基本的な組織の構成は今までどおりとし、地元愛好者等との懇談は必要に応じて開催するなどするということではいいのでは!?

■ 活動しやすい組織のかたちについて

- 組織が活動することについては、今の状況が活動しやすい気がする。
- 今後協議会のなかで活動していくことを考えると、**活動しやすいことも大事だが、活動したり考えていること(提案等)を協議会のなかで活かせる組織づくりや体制づくり**が大切なような気がする。
- 最終的には、**役割分担(代表、事務局等)が必要**になってくると思う。

本来、登山者への情報提供や登山利用への対策の実行、登山道の整備は、場当たりの行われるべきではなく、明確な将来へのビジョンをかかげて行うものと思います。今ははっきりとしなくても、その**ビジョンを明確にすべく語り続けるのが検討部会の役割**だと思います。

そのため、できるだけ広く、地域やその周辺、利尻山の登山に関わる様々な人々の意見を拾い上げられるような**間口の広い組織であってほしい**と思います。過去に数回しか登山はしていない住民や、観光事業者、夏だけ利尻山に滞在するガイドのような人々の意見も必要でしょうし、観光地の連携、実際のお客の流れを考えると、礼文島や稚内の観光・自然保護関係の人々の意見も必要でしょう。

また島には様々な研究者も訪れています。彼らは利尻町立博物館を通してアドバイスをもらうことができるはずですが、また、登山利用そのものにかかわるような研究者については、**できるだけ定期的に意見交換をするような場をつくるのが良い**でしょうし、今年の調査のように、**研究者のしたいこと、検討部会のしたいことをすりあわせて行うと、両者にメリットが生じる**でしょう。

以上のことを行うには、**しっかりとした事務局と活動の継続性**が必要となります。登山道の協議会の事務局がそれを行い、**島内の関係者を主体に常任のメンバーを定めておく**とよいと思います。

もちろん**検討部会の代表は協議会での発言権や議決権をもたせるべき**だと思います(協議会自体は

それほど硬い組織ではないと思いますが、一応正式メンバーにさせていただくくらいの意味です)。

■ 検討部会に求められる機能・役割

- 「あり方」に従った**具体的な対策を練り上げ、協議会上に上申する。**
- 協議会に**承認いただいた対策を実行に移す「部隊」の中核**を担う。

■ 組織に必要なだと考えられる人材・協力者

- 以下の番号は優先順位ではなく、単に思いついた順番です。
 - ①島に生活基盤を持つ若者
 - ②(息の長い取組みとなるため、次世代育成を担う)熱心な教育関係者
 - ③情報公開メソッド・ツールに明るい人
 - ④土木工事等のハード対策に明るい技術者
 - ⑤「利尻島(山)」に明るい研究者
 - ⑥広範な参加者をオーガナイズ・コーディネートできる中心人物

■ 活動しやすい組織のかたち

- **自由闊達な議論、そして対策の構築・実行を協議会が認めてくれるような体制**が必要。
- 実験的な試みも含め様々な試みに検討部会は挑戦するが、万が一の事故の際の**最終的な責任は、組織の「長」が構成する協議会がとることが確認されることが必要。**(ただし、検討部会が無責任なことをして良いということでは、断じてない。)

当初は独自の民間組織的なものを考えていましたが、「実行力が乏しい」「メンバーが多忙」「狭い視野・机上の論理に陥りやすい」「メンバーにも温度差がある」「対応策の実行性に疑問」「最高決定権がない」などから、現在では単独でこのような組織を地元で結成するのは無理かもしれないと感じています。

しかし、事務局案のように協議会と連携した下部組織的なものでは、「立場を離れた発言がしにくい」、「自由に発言できない雰囲気がある」、「仕事が忙しくて会議に出られない」、「タブーがある」など、今回の検討会でも如実になった心配な面が残ります。

現時点では、まだ**どちらが圧倒的に有利という感じがしない**ため、協議会の下部組織、または全くの民間組織として、取り入れていただきたい視点を含めながら、来年以降の検討会(部会)の姿を以下に思い描いてみることにしました(主に民間ベースの考えですが・・・)。

無理がある部分や整合性がないところもありますが、ご容赦いただき、ご参考にしてみてください。

<目的>

山岳環境保全のために地元ができることを企画立案し、利尻山本来のあるべき姿を将来にわたって指し示すことを目的とする。

(注)「あり方」をそのまま掲げてもよいかと思ったのですが、それは「協議会」という総括、または上位機関での話であって、ここではある程度山岳環境の保全を目指した団体・組織としての目的がよいと思いこうしました。保全にポイントをおいたのは、今回の方向性の確認にもあるように『利尻山の自然環境を守ることを最優先に登山利用を続けていく』ということも多くメンバーが望んでおり、**自然環境—地域経済—安全利用のバランスをどう持つかという視点は、民間などの協議会以下の組織の目的としては手に余る大きなテーマで、実現困難のうえ、かえって焦点がぼやけてしまう可能性もあるから**です。

<メンバー>

- ・ 地元で山岳環境に関心を持つボランティアで主要メンバーを構成
- ・ 山に登っている人、または登っていなくても関心がある人
- ・ 地元が基本だが、利尻によく通っている人、地元よりも詳しい人なども OK
- ・ 公募
- ・ 無償
- ・ 参集や連絡がすぐに取りれる人
- ・ 肩書きではなく個人として自由な発言ができる立場や状況を保障する
- ・ 地元以外の声や専門分野については、調査や勉強会、ゲスト参加などの機会を通じて取り入れる
- ・ 多忙なメンバーが多いことが予想されるため、活動内容は他機関にまかせられるものはまかせせるほか、ネットの活用などメンバーの連携がやりやすい新たな手段などを導入するなどで、低負担・高コストパフォーマンスの活動を目指す

<機能>

(1) 現状把握・情報収集

- ・ メンバーの日常的な活動で得られるもの、メンバーの人脈、独自の調査などで、山の現状をいち早く知る。

(2) 企画立案

- ・ 現状から考えられる対策を考える。
- ・ 対策案は提案書としてまとめられる。

(3) 協議会等への提案などによる実施への調整

- ・ 対策案が実現されるように協議会などの該当する機関に提案を行う。
- ・ 提案書は随時提出する。
- ・ 提出案には保全の観点から優先ランクがすべて付けられる。
- ・ 提案された対策案を実施するかどうかは提出された該当機関が協議・判断する。
- ・ 実際の実施のマネージメントも担当機関が担う。

(4) 事業の検証

- ・提案が受け入れられ、実施された場合はその検証を行う。
- ・受け入れられなかった場合はその原因などを調査し、新たな提案書を作成する。
- ・検証結果は次の企画にいかすほか、実施機関にも施行後の状況を随時報告し、フィードバックする。
- ・実施、未実施にかかわらず報告書をまとめる。

(5) 山岳環境・事業の記録とその公開・発信

- ・情報収集活動のタイムリーな発信（関連機関、登山者などへ）
- ・情報収集活動で得られたもので公開可能なものを年報としてまとめ出版公開（報告書、事業結果、調査データ、活動日誌、山岳環境の変化記録、文献紹介、謝辞など）

(注) **現在の協議会にない機能**にしぼりこみ、**メンバーの精神的・肉体的負担がなるべくないようなもの**にしました。

<活動>

- ・定例会および勉強会の開催（集まりやすい日時にて）
- ・日常的な情報収集、情報交換、提案・協議（メーリングリストなど）
- ・提案書が随時まとめ次第、提案活動を実施
- ・実施後の点検および検証登山
- ・年報の編集と出版（PDF、A4 ホッチキス止めなど体裁は最低限で）

<課題>

- ・協議会で否決された場合どうするのか？（下部組織ということでも同じことではありますが・・・）
- ・メンバーが集まらない！？
- ・多忙なメンバーが予想されるため、どのようなコンタクトの方法を導入するか要検討

3. 検討会に関するその他のご意見やご感想、議論の中で言い残したことなどがありましたらお書きください。

素朴な疑問、検討会の中で使われる言葉・状況などでわからない点や再確認したいこと、あいまいな（人によってとらえ方が異なるかもしれない）言葉の定義・イメージの中からもっと説明してほしいこと など

- （個人意見です。多数のメンバー都合によることも大切ですが、愛山会および観光業界のメンバーがなるべく出席できる日にちで、会議を持つのがいいかと思います。行政関係ばかりだと視点が偏る気がするのです。）
- 次回では、下部組織とした場合のメリット、デメリットをもう一度みなさんと整理したいほか、そのほかのしくみが可能かを探りたい。
- 「あり方」の視点として**地元島民という立場からの視点**だと思っていますが、**登山道利用者（観光客等）からみた視点**という意味も入っているのでしょうか。
- どちらの視点も共通する部分と違う部分がありますので**どの立場でみた視点かの定義づけ**が必要な気がします。
- 誰が見てもわかりやすい表現であったり、わかりやすい計画づくりなど、まずはこの**部会の活動を理解してもらいやすい内容**になっていけばと思う。基本的なコンセプトは難しいものではないと思うので…。
- 検討会資料は従来どおり事前配布とし、話し合う時間がもう少し多く欲しいと思う。
- 協議会そのものの設立経緯、具体的な設立目的、組織だて、組織としての責任の所在等がわからない。協議会を構成するメンバーは何をどこまでしよう、やりたい、やるべきと考えているのか。知りたい。